

音楽科入学生の音楽理論に関する基礎知識量の調査と分析

Survey and analysis of basic knowledge on music theory of entrance students

高瀬 健一郎

TAKASE Kenichiro

キーワード：音楽理論、新入生、知識量

Keywords: music theory, entrance students, basic knowledge

総得点では、特待生以外の入試種に、専攻楽器群では管弦打専攻に基礎知識量の不足が見られ、出身部活では音楽系とその他に大きな差は現れなかった。

「音程」は入学前に学習している。AO 入試利用者の方がその他入試より正答率が高いが、初歩的な誤りが見られた。

「和音」は、正答率が平均以下で苦手とする分野。AO とその他入試利用者との間に際立った差は見られないが、無答率は AO が明らかに低い。

属音などの「音の機能」の知識はあるものの、「音階」を正しく書けないものが非常に多かった。音階のある音を属音とする調や、ある調の属音を答えさせる問題も正答率が低い。音階をしっかりと身につけていないことに原因があると考えられる。正答率の比較では、AO 入試利用者のその他より 10%前後低く、音階は管弦打専攻の群が非常に低い。

「拍子記号」の意味は十分に理解できているが、弱起と強起についてはこの語そのものを知らない者が多い。

「調号」や「調関係」は苦手分野。正答率では入試種別の差より専攻別による差が大きく、管弦打学生の理解度が十分でない。一方、調号における #・b の数の多寡は難易度に関係しない。「調関係」は特に無答率が高く、その結果正答率が低い。

「楽語」は基本的なもののみを出題したが、正答率が想定よりも大幅に低かった。

繰り返し記号の理解度は高いが、括弧付きの反復と、D.S. の理解が低い。

全体的に管楽器専攻学生の理解度が低く、AO 入試利用者の正答率も分野によっては低い。入学前教育に一定の効果を見ることもできた。

はじめに

本学音楽科には、音楽教室等に通うなどして小さな頃から長期間にわたって音楽的な教育を受けてきた学生がいる一方、中学校・高等学校から部活動等に入って初めて音楽に本格的に触れた学生など、様々な音楽歴を持った学生が入学してくる。

音楽を学ぶ上で最も基本的な知識である「音楽理論」については、入学試験で「音楽理論」の科目を課すことで一定の知識を要求し、音楽理論を一通り学んだ学生が入学してくることを前提に音楽科におけるさまざまな授業を展開してきた。しかし、様々な経歴を持った学生が混在していることから、その理解程度の差は大きく、教育活動の課題となっていた。

さらに、一部の入試を除いて試験科目としての音楽理論を廃止したことから、「一通り学んでいる」という前提条件は大きく崩れた。そこで今回、入学前教育や音楽理論の授業、そして音楽科カリキュラムの検討に役立てることを最終目的とし、音楽理論について「入学生がどの程度の力を持って入学してくるのか」を調査し、専攻楽器グループ、入試種と関連づけながら分析を試みた。

一方、統計の状態となった数字だけでなく、個々の回答の状況についても解答用紙を点検し、同じ誤答が多く見られた場合はそれを挙げた。また、深刻な誤答については同じ問題で行われた前期末試験の答案と比較し、改善されたかを参考程度に追跡した。

なお本研究に関しては、本学研究倫理委員会の承認を得ており（H29年7月4日付 受付番号 29-007）、「定着度調査」の解答状況を利用した入試や専攻と関連付けながら使用することについて、各学生から承諾を得ている。

1：調査・分析について

①調査の時期と対象者

1年生に開講している授業科目「音楽理論」は、進度別2クラス制で授業を展開しているため、授業開始時に「クラス分け試験」を行っている。

今年は、音楽科新入生30名を対象に4月11日（火）に行われた「クラス分け試験」を「音楽理論 定着度調査」として行い、29名のデータを回収した（1名は欠席）。

29名の専攻楽器の内訳は、2-②にある「表2」に示す。

追跡調査に用いた「音楽理論A 期末試験」は、音楽理論を全般的に学ぶ授業を受けた後の7月18日（火）に行われた。

②調査の内容

最も基礎的な知識量を計ることを目的としており、また、分析を容易にするため、間違えるポイントが複数あるような設問を避けることを原則とし、珍問奇問はもちろん、俗に言う「ひっかけ問題」も避けた。

音楽理論全体を幅広く網羅したが、調判定は和声や拍子などといった様々な知識を総合して解答を導くものであり、正答できなかった原因の分析が困難であることから出題していない。

100問で構成され、分野ごとの比率は、「3：出題分野ごとの外観」で示す表の通りである（表4）。80点で「基礎知識を持っている」と考えられるよう、問題を作成した。

出題者は筆者である。実際に「音楽理論A」の授業を担当している教員は二人いるが、筆者は授業担当者ではない。

③分析について

「一定の知識があり、解いてみたが間違えた」と「全く知識がなく手をつけられなかった」ものの区別するため、解答の状況は「正答」「誤答」だけでなく、「無回答（空欄）」の3つに分けて集計した。

しかし、調査直後、学生からの「問題数が多くて解ききれなかった」という声を少なからず耳にしており、「無回答（空欄）」は「手をつけられなかった」ことは間違いはないが、その

意味は「全く知識がなかった」ことに加え「時間がなかった」が加わることになる。

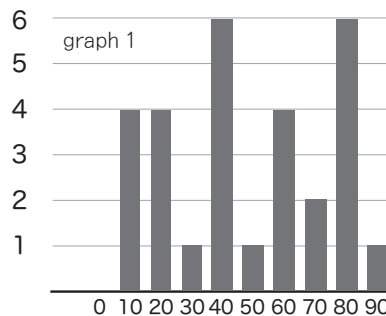
「問題は解けるものから解く」という方法がテストを受ける際の一般的な方法であるし、データにも後ろの問題に進むに従って「無回答」が増える傾向は見られない。よって、無回答の原因が知識なのか時間なのかを判断することは、困難である。

2：全体的な分析

29人の平均点は51.6点、最高点は91点、最低点は11点であった。

得点の分布を graph 1 に示す (y 軸は人数、x 軸は得点を10点刻みにとっており、「10」と書かれた棒には10～19点の人数が示されている)。

平均点付近を頂点にした山形に見えるのが普通であるが、80点台が多い一方、10点、20点台も少なくなく、様々な知識量の学生が混在していることがうかがえる。しかし、40点台の6人を除けば谷型を描いているようにも見え、基礎的な知識を一通り身につけている学生と、ほとんど身につけていない学生の、両極端に分かれているとも考えられる。



①入試種による比較

本学の入試は「AO」「推薦」「特待生」「一般」「センター試験利用」など種類が多いが、音楽理論を試験科目として課しているのは「特待生」のみである。また、それぞれの入試利用者は「AO」を除き少人数ずつであるので、今回は、利用者の多い「AO」、入試段階で音楽理論の学習を十分に積んだと考えられる「特待生」と、「その他」の3つに分けて比較することとし、専攻楽器群ごとの人数の内訳と、入試種ごとの平均点は表の通りである (table 1)。

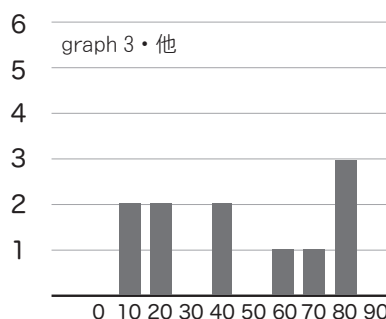
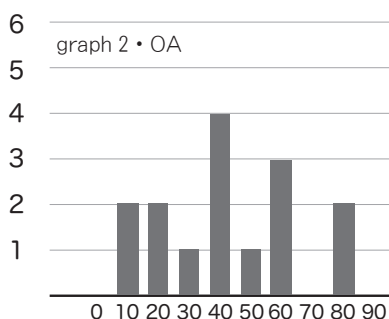
3つの入試種別ごとの平均点を見ると、「AO入試」と「その他入試」の差は3点弱で、大きな差はないと考えてよいが、両者とも平均点を下回っている。

一方、「特待生入試」とそれ以外の入試の間には、30点以上の開きが出た。「特待生入試」のデータ数は3と少ないが、この差は顕著

と考えてよいだろう。「特待生入試」の平均点は、問題を設計した際に「基礎知識を持っている」と考えられる「80点」をクリアしている。

3つの入試種別ごとの得点の分布を見ると、「特待生入試」を受けた3人の分布は70点台、80点台、90点台が一人ずつとなっており、概ね予想の通りで特筆すべきことはない。

		AO		特待		他		全体	
人数	声楽	2		1		0		3	10
	ピアノ	3	6	0	1	3	3	6	
	作編曲	1		0		0		1	
	管弦打		9		2		8	19	
	全体		15		3		11	29	
	平均点		47.1		80.3		49.8	51.6	



「AO 入試 (graph 2)」と「その他入試 (graph 3)」を見ると、双方とも得点の高い学生から低い学生まで幅広く存在している。平均点を基準に得点の高低でその人数比で考えると、「AO 入試」が 6 : 9 であるのに対し、「その他入試」は 5 : 6 であるので、「AO 入試」の方が平均点以下が厚いと見ることもできるが、一定の傾向を示すとも言いがたく、様々な理解度の学生が混在していると見るべきであろう。

②専攻楽器群による比較

学生の専攻楽器により「声楽」「ピアノ」「管弦打楽器」の 3 つで比較したいが、29 名の全体数のうち 2/3 にあたる 19 を管弦打が占め、人数が少ない他の専攻群は、傾向を示すに十分なデータ数とは言い難い。

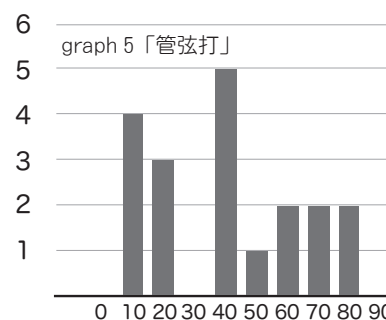
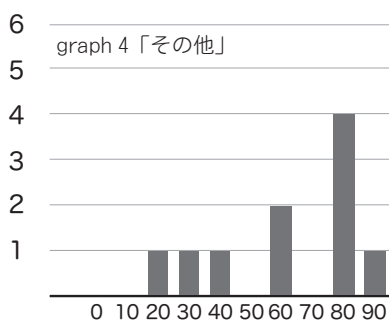
音楽歴で考えると、管弦打は中学校から音楽の世界に飛び込むことが多いが、ピアノは小さな頃から音楽教室に通っている例が多く、また、声楽もピアノから転向するケースが多い。よって、ここでは「管弦打」と「その他」の 2 つの専攻群で比較することと定める (table 2)。

	声楽	ピアノ	作編曲	管弦打	合計
人数	3	6	1	19	29
平均点	65.8			44.1	51.6

平均点と比較して「管弦打」では -7.5 点、「その他」では +14.2 点と、大きな差が表れている。

特待生入試の利用者は、「その他の専攻」の 1 名に対して「管弦打」は 2 名おり、この差は利用入試の違いによるものというより、やはり専攻全体の傾向という考え方が当たっているだろう。

次に得点の人数分布をグラフに示す（「その他」は graph 4、「管弦打」は同 5）。



「その他の専攻」は高得点である右側が高く、「管弦打」では左側が高くなっており、その違いは明らかである。

両者とも知識量の少ない学生もいるが、「その他の専攻」では半数が基礎知識をしっかりと持っている一方、「管弦打専攻」80点以上は1割程度と少ない。

③出身部活動による比較

高校時代の部活動が、音楽に関係するものとそうでないものについて分類した (table 3)

音楽関係の部活には、吹奏楽部をはじめ、音楽、合唱、ハーブなどがあつた。

音楽関係以外の部活には、代表委員、英語、茶道、放送などバラエティー豊かで、部活に所属しなかった4名は「音楽関係以外」に参入した。

全体の平均点と比較して「音楽関係の部活出身者」は+2.1点、「音楽関係以外の部活出身者」では-4.8点と差はあるが、顕著な差というわけでもない。

吹奏楽部を母体とするため、管弦打楽器専攻群には音楽関係以外の部活出身者は非常に少なく、それでも管弦打専攻群の正答率が低いものが多い。これは出身部活が影響しているものではないと判断し、詳細な比較・分析の際は出身部活に観点を置かなかった。

table 3		音楽関係		音楽以外		全体	
人数	声楽	1	4	2	6	3	10
	ピアノ	3		3		6	
	作編曲	0		1		1	
	管弦打	16		3		19	
	全体	20		9		29	
平均点	53.7		46.8		51.6		

④まとめ

入試種による比較では「特待生入試」と「AO入試を含めたその他の入試」の間に明らかな差があり、特待生入試利用者以外の基礎知識量の不足が明らかであった。

専攻楽器群により比較では、「管弦打楽器を専攻する者」と「その他の楽器等を専攻する者」の間に明らかな差があり、管弦打楽器を専攻する者に基礎知識量の不足するものが多かった。

高校時代の出身部活による比較では、「音楽に関係する部活」と「音楽以外の部活」の間に特に顕著な差は見られなかった。

本年度入試より、入学前教育について「AO入試」「自己推薦入試(新設)」は必須、その他は任意としたが、その考え方は実態と概ね合っていると考える。しかし、一定の差があると考えていた「AO入試」と「その他入試」の間に大きな差が現れなかったことから、特待生入試以外の合格者に対して、入学前教育をどこまで必須とするかが検討課題となろう。

3：出題分野ごとの概観

7つの分野の配点、正答数の平均と無答数の平均は次のようになった (table 4)。

「Ⅱ：和音」のように、「和音の種類」と「コードネーム」など、1つの分野の中でさらに細分化しているものもあるので、表の右側に小項目のデータも明示してある。

問題数は一問1点の設問が100問であり、分野ごとの配点(満点数)と出題比率(%)は同義となる。

「正答期待数」は、難易度の高い問題ではなく、基礎的な力を持っていれば十分正答できる設問の数で、I - ②で述べた通り、この問題に全て正答できれば 80 点に達し「十分な基礎的知識量がある」という判断になる。逆の見方をすれば、20 点分は「間違えても仕方ない」「このレベルまで正答できるか？」と考えて作問したことになる。

table 4	分野			小項目				
	問題数	平均 正答率	平均 無答率	内容	問題数	正答 期待数	平均 正答率	平均 無答率
I : 音程	20	60.0	1.2	音程	20	16	60.0	1.2
II : 和音	20	42.1	33.5	和音の種類	15	12	47.8	34.0
				コードネーム	5	3	24.8	31.7
III : 音階	20	51.2	28.8	音の機能	15	12	54.0	24.1
				音階	5	5	42.8	42.8
IV : 拍子	5	68.3	27.6	弱起・強起	2	2	32.8	58.6
				拍子	3	3	92.0	6.9
V : 調性	10	47.2	37.6	調号	6	4	52.3	29.3
				調関係	4	3	39.7	50.0
VI : 楽語	20	44.7	35.5	楽語	20	16	44.7	35.5
VII : 反復記号	5	76.6	9.7	反復記号	5	4	76.6	9.7
合計	100				100	80	51.6	29.4

詳しい検討は後に譲るが、分野ごとの傾向を簡単に見てみたい。

小項目「コードネーム」の正答率が低さが目立つ。総得点 80 点以上の 7 人に限ったデータは、正答率 28.57%・無答率 37.14%で、全データ 29 名のそれと大差はない（高得点群の方が無答率が高いことが興味深い）。コードネームは従来の本学入試課題の範囲外でもあり、この学年の入学前教育でも扱っていなかったため、これは予測の範囲内と考えられ、今後、入学前教育での対応が必要となろう。

また、「拍子」分野の小項目「弱起・強起」の部分も正答率が低い。（80 点以上の高得点群 7 人でも、正答率 57.14%・無答率 28.57%）。

これら 2 つを除くと、平均点を中心に概ね ± 10% の範囲に収まり、分野による極端な差はないと考えてよいだろう。それらの中では、大きな差がない中でも小項目「調関係」と「楽語」分野が弱点のようだ。

「調関係」の高得点群データは正答率 92.86%で、全体（39.66%）とは大きな差が開いた。

「楽語」は高得点群でも正答率 70.56%で、全体（44.66%）とは大きな開きがあるが、誰でも知っているような楽語しか出題していないにもかかわらず、このような正答率となったことは大きな驚きである。

4：「I：音程」について

①出題の意図

1度から8度まで、長、短、減、完全、増のすべての音程を出題した。

本来、①～⑯は、楽譜に書かれた音符をそのまま読めば正答できる問題とし、純粹に音程についての基礎力を測るようにし、⑰～⑳は調号やタイに注意しないと正答できない設問とした。

しかし、「減8度」を狙った⑰は、出題ミスにより、調号に注意する必要がある設問となり、しかも正答は「重減8度」で、難易度の高い設問になってしまった。

よってここでの分析では、①～⑭・⑰の15問を「I易」、⑮・⑰～⑳の5問を「I難」に分類した。

①～⑪は大譜表を用いたが、管楽器を専攻していてト音記号にしか慣れていない学生が多いことを考え、①～⑨は全て高音部譜表内の出題である。一方、⑩と⑪では大譜表の高音部譜表と低音部譜表をまたぐ音程を出題した。難易度を低く設定するため、調号は用いていない。

⑫～⑳は低音部譜表を用いた。特に⑮・⑰～⑳は難易度を高く設定しており、譜表による読解力を比較するような出題とはなっていない。

②解答について

全29名、ならびに入試種・専攻楽器それぞれの正答率、無答率はつぎのとおり (table 5)。

	問題数	正答期待数	全体		入試種別						専攻別			
					AO		特待		他		他		管弦打	
			正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答
I全	20	15	60.0	1.2	63.0	2.3	80.0	0.0	50.5	0.0	77.0	0.0	51.1	1.8
易	15	15	65.5	0.7	73.8	0.9	84.4	0.0	58.2	6.4	86.0	0.0	60.0	0.7
難	5	0	37.9	3.5	30.7	6.7	66.7	0.0	27.3	0.0	50.0	0.0	24.2	5.3
全問	100	80	51.6	29.4	45.9	34.1	75.5	8.6	52.8	28.7	78.0	6.0	75.8	11.6

全体的に無答率の低さが顕著である。調査の最初の設問であるため時間をかけやすかったこともあるが、音程は一通り学んできていると考えてよいだろう。

しかし、20問で75%の正答率を想定したが60%と届かず、難易度の低い問題に限っても65.5%でしかなく、十分な知識が身につけているとは言えない。

入試種別では、特待生入試の正答率が高いことは予想の通りだが、その他入試よりAO入試の方が正答率が高い。

専攻別では予想の通り、その他の専攻より管弦打の正答率が低い。

解答を見ると、長短系と完全系を混同している者(長5度、完全7度、完全2度等)が3名(全員AO入試)あり、特に1度については「短1度」「減1度」をはじめ、「0度」という誤答もあり、存在しない音程を答えた学生が5名いた(AO入試3名、特待1名、その他1名)。

「減減 7 度」と書いた学生が 1 名 (AO 入試) いたが、この学生の解答状況を見ると「重減」という言葉を知らなかったのではないかと思われる。

また、「完全 5 度」を「完 5 度」と表記した学生が 2 名 (AO 入試) いた。二人から聞きとってみると、一人は自分の判断でそのような書き方をし、もう一人は教師から省略可と指導されたとのことだった。

各問題の正答率を見ると、平均の 60.0%を下回っているのは、①、⑦ (55.17%)、⑪ (58.62%) と、難易度の高い問⑮・⑰～⑳であった。

①の出題は a～f1 の短 6 度が正答だが、長 6 度という誤答が 6 例見られた。調号もなく、出題の f1 のすぐ次に臨時記号で半音上げられた fis1 があって音を誤読したとは考えられず、①の正答率が特に低い原因は不明である。

⑦ 2 音とも臨時記号が付いた b～fis1 の増 5 度が正答だが、重増 5 度という誤答が 6 例と目立った。音程が臨時記号で半音 2 つ分広げられていることが「重増」につながったのかもしれない。

⑪は低音部譜表の g～高音部譜表の g1 の完全 8 度が正答であるが、完全 1 度という誤答が 5 例あった。この誤答は出題意図の想定内である。

学期末試験では①の長 6 度と⑪の完全 1 度という誤答はなくなり改善したが、⑦の重増 5 度は、同一人物が同じ誤答を繰り返した 1 例を含む、3 例が残った。

③まとめ

無答率の低さから音程は入学前に学習していると判断できるが、正答率は十分に高くなく、入学時点で必要な知識が身につけているとは言えない。入試種別では AO 入試利用者の方がその他入試より正答率が高く、入学前教育の効果と考えることができる。しかし、「減 1 度」など初歩的な理解に欠けていると思われる解答を書いた例に AO 入試を利用した学生が多く含まれており、少なくともこのような誤りはなくなるよう、入学前教育の際に配慮が必要だろう。

5 : 「Ⅱ : 和音」について

①出題の意図

三和音は長短増減の 4 種類、七の和音は属と減のみの出題とした。

大譜表を用い、高音部譜表、あるいは低音部譜表にだけ音があるもの、その両方にまたがって配置されているものを取り混ぜて出題してある。

①～⑮が和音の種類を問う問題 (和音) で、⑯～⑳はコードネーム (CN) を答えさせた和音のうち、⑬～⑮の 3 問はダブルシャープやダブルフラットが使われていたり、七の和音の第 5 音が省略されている難易度の高い設問とした (Ⅱ 種類 難) 一方、①～⑥は基本形の密集配置とし、しかも高音部と低音部譜表をまたがないようにして、純粹に和音の知識を問えるよう難易度を下げた。

CN は事前学習が不十分であることが予想されたため、長三・短三・属七の 3 種類に止め、基本形の CN に # や ♭ をつけなければならない難易度の高い設問を、⑱と⑳に置いた (Ⅱ CN 難)。⑳を除き、基本形の密集配置である。

②解答について

全 29 名、ならびに入試種・専攻楽器それぞれの正答率、無答率はつぎのとおり (table 6)。

table 6	問題数	正答期待数	全体		入試種別						専攻別			
					AO		特待		他		他		管弦打	
			正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答
II 種類 全	15	12	47.8	34.0	44.0	30.2	91.1	0.0	41.2	48.5	68.0	18.7	31.2	42.1
易	12	12	50.6	31.0	47.8	26.1	88.9	2.7	43.9	46.2	71.7	15.8	39.5	39.0
難	3	0	36.8	46.0	28.9	46.7	55.6	11.1	30.3	57.6	53.3	30.0	28.1	54.4
II CN 全	5	3	24.8	31.7	29.3	24.0	40.0	20.0	14.6	45.5	24.0	40.0	25.3	27.0
易	3	3	34.5	29.9	40.0	22.2	55.6	11.1	21.2	45.5	33.3	33.3	35.1	28.1
難	2	0	10.4	34.5	13.3	26.7	16.7	33.3	4.6	45.5	10.0	50.0	10.5	26.3
全問	100	80	51.6	29.4	45.9	34.1	75.5	8.6	52.8	28.7	78.0	6.0	75.8	11.6

60%であった音程の正答率と比べると、和音の種類全体で 50%弱、CN 全体では 25%弱と正答率が低く、また、数%であった無答率も 30%前後と高くなっている。

全問を通した平均と比較すると、正答率は和音全体と CN 全体のいずれも平均より低く、無答率はいずれも高い数値を示しており、苦手意識が見て取れる。

入試種別では、和音の種類に関しては特待生入試の正答率の高さが目立つ一方、その他入試と AO 入試の差はほとんどないが、無答率は AO 入試が明らかに低い。

CN に関しては AO 入試とその他入試の差は開いたが、入学前教育で CN は扱っていないので、この原因は不明である。特待生の正答率は 40%とそれほど高くなかった。

専攻別では、和音の種類に関しては音程と同じようにその他より管弦打の正答率が低いが、その差は倍以上とより大きく開いている一方、CN については両者の差はほぼない。

まず、和音の種類を問う①～⑮について状況を把握する。

回答の状況を全体的に見ると、三和音と七の和音の区別がついていない者が 8 名 (AO 入試 6 名、その他入試 2 名) おり、2 名を除く全員が七の和音を三和音と答え、その逆はいなかった。2 名 (AO 入試) はこの類の誤りを 15 問のうち 7～10 問犯しており、全く理解できていないものと判断できる。

15 問全て無答の者が 4 名 (AO 2 名、その他 2 名)、解答したのが 1～4 問でほぼ無答の状態である者が 4 名 (AO 1 名、その他 3 名) おり、入学前教育を受けていながら知識が全く身につけていない者がいることが明らかとなった。

和音の知識がないものは無答となっていると推測されるので、先の「全く理解できていないものと判断できる者」以外では奇妙な解答はなかった。

各問題の正答率を見ると、15 問のうち⑨を除く全問で平均の 60.0%を下回っている。高音部と低音部譜表をまたがない形で基本形の密集配置だけを出题した①～⑥と、譜表をまたぎ、開離配置で展開形も出题した⑦～⑮では、正答率に明らかな差はなく、また、正答率は

バラついており、和音の種類による明らかな傾向は見られなかった。

⑨は臨時記号が何もないCを主音とする長三和音を開離の第1展開形で出題したが、それでも正答率は65.5%であった。

次に、コードネームを問う⑩～⑳について状況を把握する。

間違え方は各学生様々で一定の傾向を見いだすことは難しいが、5問とも大譜表で低音部譜表にバス1音が、高音部譜表に3つの音が配置されているにもかかわらず、高音部譜表の最低音を解答していると思われる例や、展開形にかかわらずバスの音を答えていると思われる例が数例見られた。

5問全て無答のものが7名いる一方、和音の種類の一部は解答しなくてもコードネームは解答した者もいた。

正答率は予想通り極めて低く、⑰(58.6%)と⑳(0.0%)を除き、20%台であった。⑩と⑰はいずれも臨時記号のない基本形密集配置の短三和音と長三和音だが、正答率は24.1%と58.6%と大きく開いている。これはマイナーの「m」を付け忘れたというより、「m(マイナー)」や「7(セブンス)」を付けず、ただ単にアルファベットだけを答えた学生が多くいることによるもので、一定の知識に基づいて解答したというより、理解していないけれど一応解答してみたという行動によるものと思われる。

③まとめ

和音は苦手とする分野。AOとその他入試利用者との間に正答率の際立った差は見られないが、無答率はAOが明らかに低い。

入試種別で比較すると、AO入試の無答率が低いことは入学前教育の効果と考えられるが、正答率にその他入試とAO入試との差はほとんどなく、知識が身についたとは言えない。

6：「Ⅲ：音階」について

①出題の意図

主音や導音といった音の機能に関連した問題(①～⑮)と、長音階など音階そのものを五線譜に書かせる問題(⑯～⑳)の2群で構成した。

音の機能では、主音、導音、属音、下属音の基本的な機能だけに絞って出題した。基本的な知識を調号の見落としや臨時記号の考慮範囲等の影響を排除して純粹に測るため、C-durの4つの機能を持つ音を出題した(Ⅲ 4機能：①～④)。

次に、五線譜上にd音を提示し、その音を主音とする短調は何か(正答はd-moll)といったように、ある音が出題された機能を持つ調性を答えさせた(音→調：⑤～⑩)。低音部譜表と高音部譜表から出題し、低音部譜表の3問は調号が3つ以下の調性にとどめ、高音部譜表の3問は調号4つ以上の調性を出題し、異名同音で混乱が生じやすいと想像される臨時記号がつけられた音が白鍵にある「eis」等を出題し、難易度の高い設問とした(Ⅲ 音→調 難)。

続いて、へ長調の属音を五線譜上に書かせるといったような、指定された調性から出題された機能を持つ音を答えさせ(調→音：⑪～⑮)、はじめの3問は調号が2つまで、残り2

問は調号が5つ以上の調を出題し、特に⑮にダブルシャープを用いる難易度の高い設問を置いた(Ⅲ 調→音 難)。

音階は長音階、自然短音階、和声的短音階、旋律的短音階の上行形、下行形の5つを扱った。調性に特別な意図はないが、①～④でC-durを出題してしまっていることと、調号が多いと混乱して誤答を生みやすいことから、#1つのG-durとその並行調から出題した(Ⅲ 音階)。

②解答について

全29名、ならびに入試種・専攻楽器それぞれの正答率、無答率はつぎのとおり(table 7)。

table 7			全体		入試種別						専攻別			
問題数	正答期待数	AO			特待		他		他		管弦打			
		正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	
Ⅲ 4機能	4	4	75.0	12.9	76.7	13.3	75.0	0.0	72.7	15.9	90.0	10.0	67.1	14.5
Ⅲ音→調 全	6	3	49.4	20.7	34.4	27.8	100.0	0.0	57.6	37.9	56.7	20.0	45.6	33.3
易	3	3	58.6	22.4	44.4	17.8	88.9	0.0	66.7	30.3	60.0	13.3	57.9	24.6
難	3	0	40.2	36.8	24.4	37.8	83.3	0.0	48.5	45.5	53.3	26.7	33.3	42.1
Ⅲ調→音 全	5	4	42.7	27.6	33.3	40.0	86.7	0.0	43.6	18.2	58.0	28.0	34.7	27.4
易	4	4	50.0	25.9	40.0	36.7	100.0	0.0	50.0	18.2	65.0	25.0	42.1	26.3
難	1	0	13.8	34.5	6.7	53.3	33.3	0.0	18.2	18.2	30.0	40.0	5.3	31.6
Ⅲ 音階	5	5	42.8	42.8	33.3	53.3	86.7	0.0	43.6	40.0	72.0	22.0	27.4	53.7
全問	100	80	51.6	29.4	45.9	34.1	75.5	8.6	52.8	28.7	78.0	6.0	75.8	11.6

4つの音の機能についての全員の正答率の平均は75.0%で、全問を通した平均(51.6%)を上回っており、十分な知識を持つ分野だったことがうかがえる。

入試による3つの群の正答率は、どれも概ね75%で並んでいて差は見られなかったが、専攻による2つの群では管弦打の67.1%に対しその他の90.0%と、明確な差が現れた。

個々の設問を見ると、「主音」の正答率が最も高く89.7%で、次いで「属音」の75.9%が続き、最も低いものは「導音」で65.5%であった。

「主音」は、解答した者は全員正答で、残りの10.3%は無答の者であった。

「導音」の誤答で目立ったのはE音で、4例あった。上中音は必ず学習するものでもなく、誤答が集中した理由は明らかではない。

「属音」と「下属音」の誤答に、明らかな偏りは見られなかった。

出題は「任意の音部記号を使って」となっており、低音楽器の学生には慣れた低音部譜表で答える例が多かった。しかし、調査としては高音部譜表と見なして正答としたが、五線に音部記号を書いていない者が2名いた。また、各小節ごとに音部記号を書き入れた者もあり、楽譜に関する基本的な規則の理解が十分でないことがうかがわれる。

「b が属音の長調は何か」のように、ある音が出題された機能を持つ調性を問う問題群の全員の正答率の平均（音→調 全）は 49.4%で、無答率は全問を通した平均程度であるにもかかわらず、正答率は下回っている。この傾向は、調性から出題された機能を持つ音を問う問題群（調→音 全）の 42.7%も同様である。

この理由は、音階そのものを五線譜に書かせる問題群（音階）の平均正答率が 42.8%であり、無答率が同じ 42.8%にも達することが関連しているように思われる。

入試種で比較すると、AO 入試が 34.4%でその他入試（57.6%）を大きく下回っている。

出題された機能を持つ音から調性を問う問題のうち、難易度を低く設定した 3 問の正答率は、全問を通した平均を上回った。「主音」と「導音」を問う 2 問は 62.1%、「下属音」を問うものは微減の 51.7%で、この傾向は 4 機能での状況と一致する。

入試種では、この分野も AO 入試が 33.3%でその他入試（43.6%）を下回った。

全問を通した平均を下回るのは高難易度の 3 問で、「導音」と「下属音」を問う設問であった。

4 機能の問題群で「導音より属音の方が正答率が高い」という傾向が見られたが、ここの設問の性格から「導音」を問うものが高難易度設問群に集中してしまったことにより、正答率が低い原因として「調号の多さ」と「導音の認知度」の 2 つが想定されることになり、そのどちらなのかは確認することができなかった。

「F-dur の属音は何か」というような、調性から出題された機能を持つ音を問う問題のうち、全問を通した平均を下回ったのは、導音を問う 3 問（正答率 41.4%と 34.5%。高難易度に設定した⑮は 13.8%）であった。正答率が高いのは「属音」と、次いで「下属音」であり、これは 4 機能の問題群と同じ傾向であり、理解度が高いのは、主音→属音→下属音→導音の順であると考えてよいだろう。

音階についても、全員の正答率の平均は 42.8%で、全問を通した平均を大きく下回った。かなり易しい設問と考えていたが、結果は大きく異なり、ショックでさえある。

入試による 3 つの群の正答率は、その他入試が特待生入試（86.7%）の半分でしかない 43.6%、AO 入試はさらに 10%も下回る 33.3%である。

専攻の 2 群を比較すると、その他の 72.0%に対して管弦打が 27.4%と、大きな差が生じている。

個々の設問を見ると、「長音階」の正答率が最も高く 72.4%であった他は、「和声的・旋律的短音階」が 35%前後で並び、「自然短音階」は最も低い 27.6%であった。5 つの音階を全て正答できたのは 20.7%でしかなかった。

「調号を使わずに」という問題であるにもかかわらず調号を使って解答した例が少なからずあったが、調査上は調号を使った場合でも、音が合っていれば正答の扱いとした。その他の誤答に一定の傾向は見られず、音階が理解できていないという深刻な現実を突きつけられる結果となった。

臨時記号を符頭の真横に書かず、左上（高音部譜表の Fis の場合、第1間でなく第2線上）に#が書かれている例があった。

③まとめ

4つの音の機能については概ね十分な知識を持っており、入試種による差も大きくないが、専攻別では管弦打が弱い。

音がある機能を持つ調性を考えるもの、調性の中である機能を持つ音を考えるもの、そして音階についてのいずれも AO 入試利用者の正答率が低く、入学前教育におけるこの分野の充実が望まれる。特に音階は様々な理解の土台となる知識であり、しっかりと身に付けることができるよう、工夫が必要であろう。

また、全体的に管弦打楽器の知識量が十分でなく、注意が必要である。

7:「IV:拍子」について

①出題の意図

弱起と強起(①と②)、そして拍子記号の意味を問う問題(③～⑤)で、文章の空欄に該当する語や数字を入れる、穴埋め方式の設問とした。

弱起と強起については、楽譜にそれらの例を示し、さらに文章で「1拍目以外の拍から始まること」などと説明をつけた。解答として何を求めているのかを理解しやすくするため、空欄は「()起」とし、「弱起」などの語に思いが至りやすいよう考慮した。

拍子記号も楽譜で例を示し、その記号の意味することを答えさせた。

②解答について

全29名、ならびに入試種・専攻楽器それぞれの正答率、無答率はつぎのとおり(table 8)。

弱起と強起についての全員の正答率の平均は32.8%で、全問を通した平均(51.6%)と比べて著しく低い。問題の意図が伝わりにくかったことも考えたが、文章でも説明しており、このような事項を学習していないと考えても良いだろう。

table 8	問題数		正答期待数		全体								入試種別				専攻別			
					AO				特待				他				他		管弦打	
					正	無	正	無	正	無	正	無	正	無	正	無	正	無	正	無
IV強起弱起	2	2	32.8	58.6	36.7	60.0	0.0	66.7	36.4	21.8	40.0	60.0	29.0	57.9						
IV拍子記号	3	3	91.6	6.9	84.4	13.3	100.0	0.0	100.0	0.0	96.7	0.0	89.5	10.5						
全問	100	80	51.6	29.4	45.9	34.1	75.5	8.6	52.8	28.7	78.0	6.0	75.8	11.6						

入試別で見ると特待生入試利用者の正答率が0.0%となっていて、意外である。3名のうち2名が無答、1名が誤答であった。

専攻別でも、特別に言及するほど大きな差は見られない。

「弱起」は答えられても「強起」は無答の者が3名いた。「弱起」という語は使っても、「強起」という語をわざわざ使うのは音楽理論の授業の時ぐらいであろうから、強起の方が知名

度が低いのかもしれない。

また、「(弱)起」となるべき括弧内に「アフタクト」と記入した者が1名いた。設問を「()起」とせず、ただの括弧となっていれば「アフタクト」と書き入れることのできた者は多かったのかもしれない。

拍子記号についての全員の正答率の平均は非常に高い(91.6%)。

正答しなかったのは3名で、うち2名は無答、1名が誤答であった。

無答は両者とも無答の解答欄が非常に多く(いわゆる白紙)、解答する時間が足りなかったものと推測される。誤答は「3/4」を「3分の4拍子」と逆に読んでしまった誤りだが、「小節の中に4拍子が3つ入っている」の部分(⑤)は正答しているの、うっかりミスと判断できる。

③まとめ

「弱起」「強起」という語を知らないものが多いことが想像される。入試種に差は見られず、それは入学前教育の効果が上がっていないことにつながる。

拍子記号の理解に問題はない。

8 : 「V : 調性と調号、調関係」について

①出題の意図

調号から調性を問う問題(号→性:①~③)、調性から調号を問う問題(性→号:④~⑥)、関係調を問う問題(関係調:⑦~⑩)の3群で構成した。

調性は「C-dur」などのドイツ語表記を基本としたが、不慣れな学生も多いことから「ハ長調」など日本語による表記もカッコ付けて併記し、調号を答えさせる場合は任意の音部記号で答えられるようにした。

調号の出題範囲は特に絞らず、調号1~5つまでを全体的に出題し、調号を書かせる群では、調号の変位記号の並び順を見るために、調号の数が多い調性を出題した。関係調は4種類を1つずつ出題し、各群最後の問題(③⑥⑩)は、調号の数が5つの難易度の高い設問とした。

②解答について

全29名、ならびに入試種・専攻楽器それぞれの正答率、無答率はつぎのとおり(table 9)

table 9	問題数	正答期待数	全体		入試種別						専攻別			
					AO		特待		他		他		管弦打	
			正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答
V 号→性	3	2	59.8	20.7	55.6	31.1	88.9	0.0	57.6	12.1	80.0	16.7	49.1	22.8
V 性→号	3	2	44.8	37.9	35.6	42.2	88.9	0.0	45.5	42.4	76.7	10.0	28.1	52.6
V 関係調	4	3	39.7	50.0	23.3	66.7	83.3	0.0	50.0	40.9	57.5	30.0	30.3	60.5
全問	100	80	51.6	29.4	45.9	34.1	75.5	8.6	52.8	28.7	78.0	6.0	75.8	11.6

調号から調性を問う問題の全員の正答率の平均は 59.8% で、全問を通した平均 (51.6%) を上回っているが、それ以外の調性から調号、並びに関係調を問う問題は下回っており、調号と調関係は苦手な分野であることを示している。

調号から調性を問う群を入試種によって比較すると、AO 入試 (55.6%) とその他入試 (57.6%) に目立った差はないが、専攻別による比較では、明らかに管弦打専攻の正答率が低い。

調性から調号を問う群は、その逆の設問より正答率が下がり、無答率も上がっている。入試種による差 (AO が 35.6%、その他が 45.5%) もあるが、専攻別の差 (その他 76.7%、管弦打 28.1%) が特に大きい。

関係調を問う群は、入試種別では AO 入試が、専攻別では管弦打が、正答率と無答率の双方において著しく悪い。

また、高難易度として設定した 3 問と他の設問との間に、大きな差は現れなかった。これは、きちんと理解できている者は調号の数が多くても正答できるし、理解できていない者は調号が少なくても正答できないということを示している。

個々の設問を見ると、「調号→調性」の 3 問はいずれも全問を通した平均 (51.6%) を上回っている。② (正答率 51.7%) は、高難易度として設定した③ (58.6%) を下回った。②は唯一短調を問う設問で、長調から短調への変換というひと手間が問題であったと考えられ、「変ホ短調」(♭ 3 つが変ホ長調というところまでたどり着いたが、そこからさらに短 3 度下ろさずに長調から短調だけを変換したと思われる) の解答例が 2 例、「変ハ短調」(変ホ長調から長 3 度下ろしてしまっと思われる) の解答例が 1 例あった。

「調性→調号」の 3 問でも、長調を問う④だけが全問を通した平均正答率を上回り、高難易度として設定した⑥が最も低かった (37.9%)。誤答に明らかな傾向は見られず、解答を記入した者は、誤答であっても # 系と ♭ 系の区別はついていた。

五線に音部記号を書かずに調号だけを書いた者が少なからずおり、指導に注意が必要だろう。

調関係を問う 4 問では、無答率が 50.0% の高い上、すべての設問で全問を通した平均正答率を下回った。⑨の同主調でも正答率は 48.3%、次いで属調を問う⑦ (41.4%) で、属調の正答率が高いのは「Ⅲ：音階」の 4 機能での傾向と同じである。

無答率の高さについては、解けずに記入できなかった者だけでなく、「Ⅶ：繰り返し記号」の無答率が非常に低いことから、調査の後半で解答時間がなくなって容易に解答できそうな問題を優先した者の存在も考えられる。

c-moll の属調を問う⑦での誤答では、完全 5 度上という音程は合っていたものの長調に変換してしまった「G-dur」が 2 例、また、並行調と混同した「Es-dur」が 1 例あった。

B-dur の下属調を問う⑧では、5 度下だがフラットが消えてしまった「E-dur」が 3 例、属調と混同した「F-dur」が 1 例あった。

D-dur の同主調を問う⑨の誤答は、短調に変換するミスはしなかったが音程関係を平行調と混同した「F-dur」の 1 例のみで、あとは無答であった。

b-moll の平行調を問う⑩は、3 度上だがフラットが消えてしまった「D-dur」が 1 例あった他、「Es-dur」が 2 例あった。

③まとめ

調号からその調性を答える点では、AO 入試とその他入試の間に目立った差は見られないが、管弦打専攻の知識量は十分ではない。

ある調性の調号を答える方が、難易度が高い。管弦打専攻の知識が十分でなく、それに伴って管弦打専攻が多い AO 入試の正答率が下がっているものと考えられる。

関係調についても同様の傾向だが、無答率が特に高い。

これら調号と調関係については苦手分野と判断できるが、入学前教育で対応できる余地も少なくないと思われる。

なお、調号の＃・♭の数は多くなるほど正答率が下がると予想したが、大きな影響は見られなかった。

9：「VI：楽語」について

①出題の意図

日本語から楽語を書かせる設問はなく、楽語の意味を答えさせる設問に限った。速度、強弱、発想標語、の比率は特に考慮せず、感覚的な基準だが、頻繁に使われ目にする事が多いと思われる楽語を出題した。

⑰～⑳の 4 問は、意味を答えられる者が少ない高難易度として設定した。

問題用紙に「これらの楽語の意味を答えなさい」等の一文が抜けてしまうというミスがあった。

②解答について

全 29 名、ならびに入試種・専攻楽器それぞれの正答率、無答率はつぎのとおり (table 10)

難易度による区別が主観的な基準であったことと、集計の結果、その区別がデータとして意味をなさない状態であるため、易・難を区別した正答率等は省略する。

table 10			全体		入試種別						専攻別			
問題数	正答期待数	AO			特待		他		他		管弦打			
		正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	正答	無答	
VI全	20	16	44.7	35.5	40.0	42.3	73.3	8.3	43.2	33.6	54.5	24.0	39.5	41.6
全問	100	80	51.6	29.4	45.9	34.1	75.5	8.6	52.8	28.7	78.0	6.0	75.8	11.6

全員の正答率の平均は 44.7%で、予想と大きく異なり、全問を通した平均 (51.6%) を下回り、無答率も 35.5%とかなり高い。

入試種によって比較すると、AO 入試とその他入試の間に目立った差は見られない一方、専攻別による比較では、管弦打専攻の正答率が明らかに低い。

個々の設問を見ると、全問を通した平均を上回ったのは「⑬ cresc.」「⑭ a tempo」「⑮

dim.」「④ rit.」「⑦ poco」「⑩ poco a poco」「⑬ dolce」「⑱ cantabile」の8問で、いずれも正答率は60%以上、⑫～⑭の3問は70%以上で正答率が特に高かった。

一方、正答率が特に低かった（平均の半分以下）のは、「① Adagio 正答率 20.7%」「⑱ tranquillo 20.7%」「⑧ sempre 17.2%」「⑮ calando 6.9%」「⑳ grazioso 6.9%」の5問であった。

VI全体が無答のものは2名で、両名とも解答用紙の裏面全体がほぼ白紙の状態であり、解答する時間がなかったと判断できる。

最も正答率の高い「⑬ cresc.」は正答 23、誤答 2、無答 4 だが、誤答の 2 名は意味でなく読み方を答えたもので、無答の 4 件のうち、時間切れの 2 名を除く残りの 2 名は本当に答えられなかったものと考えられる。

正答率が高い8問は、少し意外な感じを受けるのは「⑱ cantabile」くらいで、概ね「そうだろう」と思われるものが並んでいる。

正答率が低い5問では、「⑱ tranquillo」「⑳ grazioso」を除くと、正答率ももっと高くてもという印象を受ける。

③まとめ

楽語に関する知識は想像していたものよりかなり低い。わずかであるが AO 入試が低く、このことは入学前教育で改善できる余地があることを示している。限られた時間の中では扱える内容に限りがあるので、自宅学習を促す資料等の活用が必要と思われる。

10：「Ⅶ：繰り返し記号」について

①出題の意図

小節線や1番括弧等による繰り返し、D.C. と D.S. を出題した。D.S. 後の省略箇所を含む⑤は高難易度の設問とした。

②解答について

全員の正答率の平均は 76.6% で、全問を通した平均 (51.6%) を大きく上回っており、また、無答率も 9.7% と非常に低く、知識を持っている分野と判断できる。

しかし、入試種では AO が 60.0%、特待 100.0%、その他 92.3% と AO 入試が特に低い。専攻別では差が見られない（他専攻 78.0%、管弦打 75.8%）ので、純粋に入試の受験生像によるものと判断できる。

単純な繰り返しのみの①、D.C. の③、D.S. の④は正答率が 80% 以上で、無答率は 6.9% であった。5 問全てが無答のものうち 1 名は解答用紙の裏面すべてが白紙で「時間切れ」と判断できるが、もう 1 名は解答する分野を選んだ上でこの項目は無答としており、他により確かな知識を持つと考えた分野があったと考えられる。

1 番～3 番括弧まで出題した②は 72.4% で正答率がやや落ち、高難易度として設定した⑤は 51.7% の正答率であった。

個々の設問を見てみる。

①の誤答 2 名（ともにその他入試利用者・管弦打専攻）で、いずれも「A B C D E F E F」であった。線の左側に複点がある「前に戻るべき反復記号」を線の右側に複点がある「反復

点を示す反復記号」を取り違えている上に、単なる「終止線」で反復しており、知識の状態はかなりひどいが、半年の学習を終えた期末試験では誤りが修正された。

③の誤答は 1 名 (AO 入試・その他専攻) だが、「ABC」しか記載しておらず、無答に近い状態であった。

④は無答が 3 名、同じ誤りをした誤答が 2 名 (両名とも AO 入試、専攻は管弦打とその他) おり、繰り返して戻る位置を D.C. と同じと考えている (あるいはセーニョ記号の意味を理解していない)「ABCDEF ABCD」であった。

②の正答率が低いのは、意外であった。誤答は 6 名 (AO 5 名、管弦打 4 名) おり、その間違え方は多様であるが、3 番括弧に跳ぶ際は 1・2 番括弧内を演奏しないという規則を理解できていない点が共通していた。

⑤は無答が 5 名。誤答は 8 名いた。D.S. で S 記号へ戻ることは理解しているが、そのあと跳躍を示す記号で跳ばなかった「ABCDBCDEF」の誤答が 3 名おり、その他は D.C. と混同した例、記号間を反復した例など、多様で一定の傾向は見いだせなかった。

③まとめ

繰り返し記号の知識は持っているとは判断できるが、括弧付きの反復 (1 番括弧、2 番括弧) と、D.S. の理解が低い。専攻別では差がなく、入試種別の AO 入試のみ知識量が十分でなく、入学前教育の工夫が必要である。

音楽理論A 定着度調査 問題用紙

2017.4.11 312教室

I : 音程並びに変化記号 (20)

楽譜中の①~⑭の音程を答えなさい。

II : 和音 (三和音・属七・減七) とコードネーム (20)

次の①~⑮の和音の名称 (長三和音など) を日本語で答えなさい。

次の⑯~⑳の和音のコードネーム (「C」など) を答えなさい。

III : 音階 (20)

C-dur (ハ長調) で①~④にあたる音を任意の音部記号を使って書きなさい。

- ① 主音 ② 導音 ③ 属音 ④ 下属音

次に示した音が当てはまる調性を答えなさい。

次の音を、任意の音部記号を使って全音符で答えなさい。

- ⑪ F-dur (ハ長調) の属音
- ⑫ d-moll (ニ短調) の導音
- ⑬ d-moll (ニ短調) の下属音
- ⑭ b-moll (嬰ハ短調) の導音
- ⑮ gis-moll (嬰ト短調) の導音

次の音階を、全音符で任意の音部記号を使い、調号を用いないで答えなさい。

- ⑯ G-dur (ト長調) ・ト調長音階
- ⑰ e-moll (ホ短調) の自然短音階・ホ調自然短音階
- ⑱ e-moll (ホ短調) の和声短音階・ホ調和声短音階
- ⑲ e-moll (ホ短調) の旋律短音階・ホ調旋律短音階の上行形
- ⑳ e-moll (ホ短調) の旋律短音階・ホ調旋律短音階の下行形

IV : 拍子 (5)

次のかっこ内に当てはまる語や数字を答えなさい。

- ・次の《譜例A》のように、1拍目以外の拍から始まることを (①) 起と言ひ、《譜例B》のように、1拍目から始まることを (②) 起と言ふ。
- ・《譜例C》は (③) 分の (④) 拍子と言ひ、1小節の中に (⑤) 分音符が3つ入っている、つまり、この旋律が3拍子で、一拍の単位が (⑤) 分音符であることを示している。

V : 調性と調号、調関係 (調判定は除く) (10)
次の調号を見て、該当する調性を答えなさい。

①この調号の長調 ②この調号の短調 ③この調号の長調



次の調性の調号を、任意の首部記号を使って書きなさい。

④ As-dur (変イ長調) ⑤ cis-moll (嬰ハ短調) ⑥ b-moll (変ロ短調)

次の調性を答えなさい。

- ⑦ c-moll (ハ短調) の属調
- ⑧ B-dur (変ロ長調) の下属調
- ⑨ D-dur (ニ長調) の同主調
- ⑩ b-moll (変ロ短調) の平行調

VI : 楽語 (20)

- ① Adagio ② Moderato ③ Andante ④ rit. ⑤ accel.
- ⑥ molto poco ⑦ poco ⑧ sempre ⑨ ma ⑩ poco a poco
- ⑪ subito ⑫ a tempo ⑬ cresc. ⑭ dim. ⑮ calando
- ⑯ dolce ⑰ espressivo ⑱ tranquillo ⑲ cantabile ⑳ grazioso

VII : 繰り返し記号 (5)

次の楽譜について、演奏される順番をアルファベットで答えなさい。